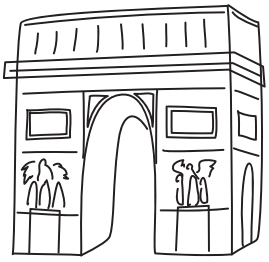
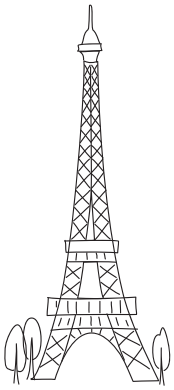
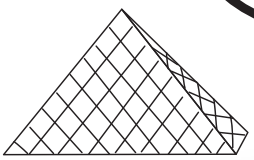
セルフプロデュース
学生記者卒業記念コラム





力試しの珍道中



文&写真 学生記者 森真優（法学部4年）

4年間の大学生生活もまもなく終わりを迎えようとしている。

地元・兵庫から上京して初めての１人暮らし、そして自炊。初めて本格的に勉強した“法”という学問。答えのない問題に苦戦しながらも小学生の頃から憧れていた法学部で学べたことはとてもうれしかった。

大学３年から始めた学生記者としての活動も、普通に過ごしていては出会うことのできない方々から直接お話を伺えたことは、貴重で忘れられない経験となった。

この4年間での様々な経験を通して学ぶことも多くあり、自分自身が成長できたと思える、そんな大学生生活だった。

大学生になってから毎年楽しみにしていたことがある。それは夏休みに家族で海外旅行に行くことだ。

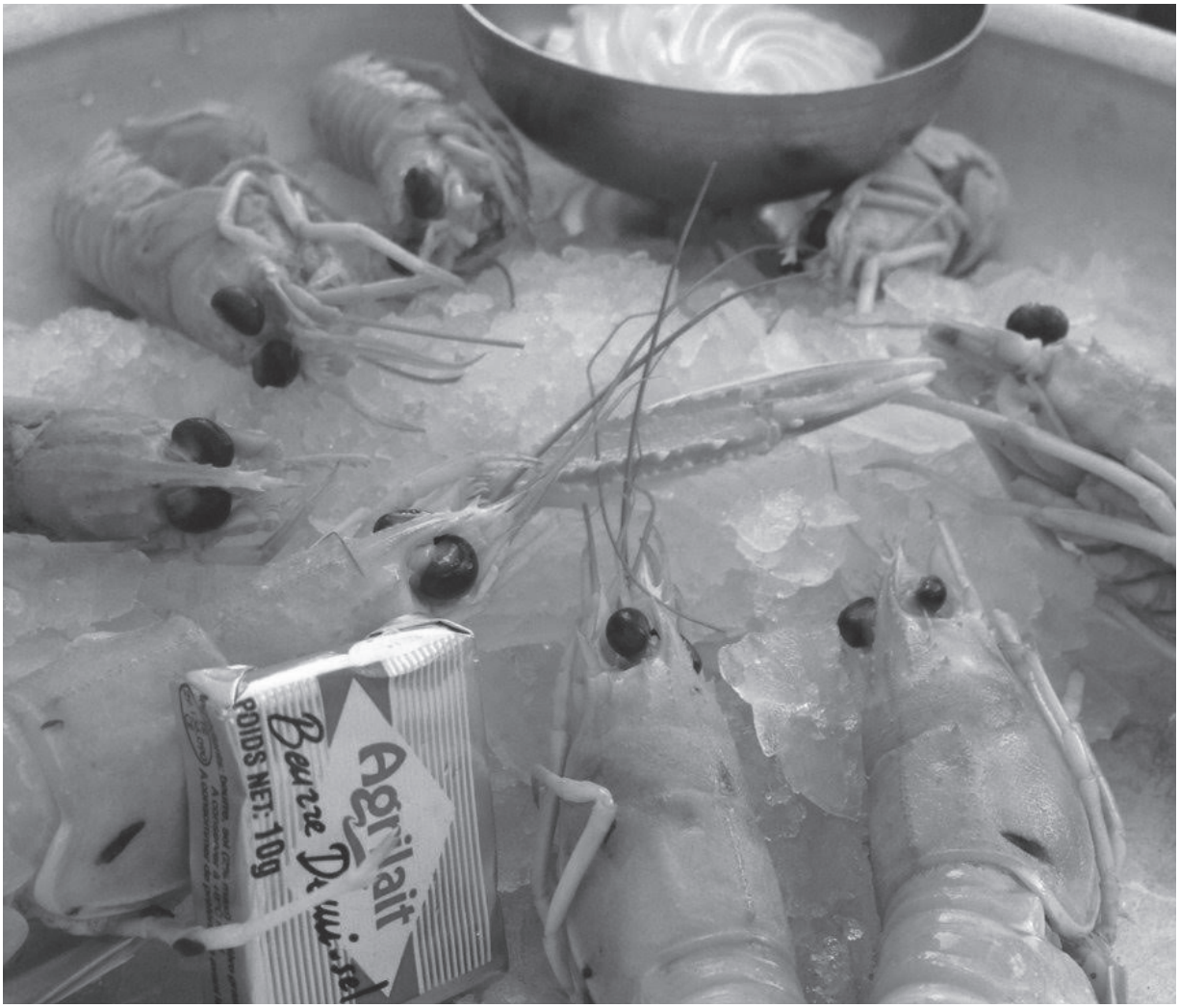
フランスやハワイ、アメリカ・ロサンゼルスなど今まで写真でしか見たことのなかった場所に行き、観光名所を訪れ、壮大な景色を自分の目で見たことはもちろん、その国々の人や文化に触れることで自分の考え方も変わったように思う。

その中でも一番印象に残っているのは、1年生のときに訪れたフランスだ。

どうしてこの国を旅先に選んだのか。1番の理由は第二外国語として学び始めたフランス語を現地で実践してみたいと思ったことだった。

実は、フランスを訪れたのはこのときが２回目。1回目は高校２年生のときの修学旅行だった。

当時、旅行直前に数回ほど語学の勉強をし、簡単なあいさつや単語を習得していたが、そのほかの会話は英語でしか伝えることができず、フランス語を話せるようになってもう一度この国を訪れたいと思うようになり、大学



フランス語で注文した手長エビ、手前（箱）がバター、奥にマヨネーズ

入学時に第二外国語を選ぶときは迷いなくフランス語を選択した。

２度目に訪れたこのときは、島全体が修道院の世界遺産、モンサンミッシェルを1泊2日で訪問した後、パリ市内を散策するという1週間の旅程だった。

修学旅行ではシャルトルやブロワ地方といったパリ郊外を訪問し、パリ市内はバスの車窓から見学していたため、テレビや雑誌で何度も目にしたことのあるモンサンミッシェルの景色やパリの観光名所を自分の目で見て、歩くことができたときの感激した気持ちは今でも忘れられない。

モンサンミッシェルの島内を散策しているとき、新鮮なシーフードを味わえるレストランに立ち寄った。広い店内を見渡しても日本人の姿はほとんど見えず、お店の人が渡してくれたメニューもフランス語と英語の表記のみだった。

この旅を通して、メニューの注文、お土産を買うときは日本語を決して使わないこと、英語もなるべく使わないと決めていた。

メニューを見て何を食べるか家族と話していたとき、母が隣のテーブルを見て一言、「手長エビが食べたい」

手長エビ料理をフランス語で注文

フランス語を話せるとはいえ、まだ基礎を習得したばかり。“手長エビ”という単語はもちろん知らない。しかし、現地に行ってフランス語を話し、通じるか確かめたいと言い出したのは私だ。

なんとかして注文しなければならない。悩みに悩んだ末、「Long sleeve shrimp s’il vous plait！」英語とフラン

島全体が修道院の世界遺産、モンサンミッシェル

ス語を組み合わせるという斬新な頼み方に店員さんは少し笑いながらも理解してくれたように見えた。

注文をしてから料理が届くまでちゃんと伝わっているのかハラハラドキドキしながら待っていると、店員さんが大きなお皿を持って私のテーブルにやってきた。お皿には綺麗に並べられた手長エビが。

料理を注文するのにこんなに緊張することは、今までもこれからもきっとこれが最後だろう。甘くてプリプリした身の手長エビはとてもおいしかった。

モンサンミッシェルを後にし、パリ市内を散策。エッフェル塔、凱旋門、ノートルダム大聖堂と憧れのパリの景色に今でも自分があの場にいたのだと思うと大きな感動がよみがえってくる。

そしてパリと言えば、モナ・リザや落ち穂拾いといった世界的にも有名な芸術作品を収蔵している美術館も観光名所のひとつである。滞在最終日に私もルーブル美術館とオルセー美術館を見学した。

ルーブル美術館内には、本格的なフランス料理を味わえるレストランが併設されており、見学前にそのレストランで食事をしたときだった。

この国では食事を楽しんでいると店員さんがやってきて味はどうかと尋ねてくれる。この日も陽気なムッシュがテーブルにやってきて尋ねてくれた。

「C'est bon.（おいしいです）」そう答えると、ムッシュは「フランス語を話せるのか？」と話を続けてくれた。

私はまず自己紹介をして、大学で勉強していて、少し話せるということを伝えた。

ムッシュは私の話を熱心に聞いてくれて、いい発音ができているよ、と褒めてくれた。そしてこれからも勉強を頑張って、またフランスに来てね、と笑顔で見送ってくれた。

自分のフランス語が通じたこと、そして発音を褒めてくれたことはもちろん、料理の注文だけにとどまらず現地の人と交流できたことが何よりもうれしく、大切な思い出となった。

到着直後はちゃんと通じるのかという不安の方が大きかったが、失敗を恐れず、勇気を出して話してみることで自信がつき、旅の中盤からはスラスラと話せるようになっていることが自分でも分かるほどだった。

フランス語を学び始めて４カ月という決して長い期間勉強したとは言えない時期での旅行ではあったが、帰国後、フランス語を学ぶことに対するモチベーションが上がり、より一層、一生懸命勉強するようになった。

２年前に第二外国語の授業が終了してもなお、当時使っていた教科書を時々見直すこともある。

次回またフランスを訪問するときまでに、より多くの単語を覚えること、それが今のわたしの目標だ。

いつまでも学ぶことに対する意欲を忘れない、そんな社会人でいたいと思う。

凱旋門前で母と記念撮影